

史苑をたずねて

高橋 秀

立教大学史学会の仕事にたずさわって二年になろうとしている。その間に、以前は気にしなかったことが、気になるようになった。その一つは『史苑』という誌名は、どのようにして出てきたのか、ということである。どなたによって、どんな思いをこめて、この誌名が決められたのであろうか。

史学科の読書室の書棚には、創刊以来すべての『史苑』が揃っている。そこまでまず創刊号以下、数字をひもといてみたが、誌名の説明は見あたらなかった。さらに『史苑』の五十号記念、復刊第一号、百号記念『立教大学史学会小史』などにも当たってみて、いづれにも興味深い知見を得させて頂いたが、目指すものには出会わなかった。あるいは、創業の頃には、会誌とは別に会報のようなものがあって、誌名の趣旨などは、

そちらに記されていたのかもしれない。しかしそれも不明である。

次に取るべき方法は、聞込みであろう。創業の頃をご存じのかたに伺っておけばよかったと思うが、今となっては、六十有余年前をご存じのかたは少数であろう。それにこちらの都合であわただしく往事をお尋ねするのも失礼であり、いづれ機を待つほかはないと、このさいは思いとどまることにした。

おそらく、創業の頃は、誌名の趣旨は関係者には了解されており、あえて書き記すには及ばなかった、ということであろうか。行動することと記録することは別であるから、意気さかんに行動するかたがたの間では、記録することなどは念頭になかったということであろう。この拙文をごらんになって、誌名の由来をご教示くださるかたがいらっしゃったら、本当にあり

史苑をたずねて（高橋）

がたいことである。ぜひおしらせくださるようお願い申し上げます。

諸橋『漢和大辞典』を引いてみると、史苑という用例は載っていない。「苑」をひくと、一、まき、まきば、垣を設けて禽獸を養う林野。二、その、花卉菜果などを植える圃いあるところ。とある。そして、四、事物のあつまるどころ、類をもつてあつまったもの。とあつて芸苑や文苑の用例があがっている。上田『大字典』には苑と園の区別が述べられている。いずれも圃いがあつて、鳥獸草木を養う場所であるが、苑のほうが広いようであり、また圃いの造りが、園のほうが嚴重のようである。そして、「詩にては苑園通用し、文章にては別つべし」という説明が面白かつた。

このあとで『立教学院百年史』をひもといて、ひとつの想像をたのしんだ。『百年史』には『築地の園』がしきりに引用されている。『築地の園』は立教学院ミッシヨンの機関誌で、一八九八年創刊、一時休刊、一九二二年復刊、一九三一年、三百号をもって終刊となる。立教の池袋校舎落成式は一九一九年、築地の園から池袋の園への発展がおこなわれる。史学科創設は二五年、史苑創刊は二八年。消えゆく『築地の園』に代わって「歴史の苑」を興そうではないか、これが関係者の心意

気ではなかつたらうか。

ここから話を西洋古代に持っていきたい。今日では学園という言い方は当たり前であるが、「ソノ」が学芸の場になったのは、古くはエピクロス（前三四二—二七一）の場合が有名である。ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』の「エピクロス伝」（加来彰俊訳、一九九四年、岩波文庫）によると、人々はアテネの彼のところにやつて来て、彼の庭園のなかで彼とともに暮らしたという。彼は次のような遺言を書き残した。「わたしはわたしの全財産を、二人の者（人名省略）に遺贈する。両名は、庭園とそれに付属する施設を、哲学を研究する者たちに提供して、この人たちがそこにおいて哲学の研究に励みながら暮らせるようにすること。またわたしは、わたしにならつて哲学する人たちに、今後ずっとこの庭園での研究生活を許すが、その人たちはできるかぎり、両名に協力して、この庭園を維持するように努めること。」この遺言は、「庭園」を「史苑」に、「哲学」を「歴史学」に読み換えると、ほとんどそのまま『史苑』関係者への教訓になる。

「エピクロスの園」の場所は、アテネの中心部、アクロポリスの北西麓、ディピュロンの近くにあつた。

そのことは、キケロの『最高善と最大悪』の対話やプリニウスの『博物誌』から知られる。その場所をめぐる最近の調査研究については、アテネ大学留学中の本学大学院生高橋裕子さんに資料を探して送って頂き、勉強させてもらった。

「エピクロスの園」という言い方は、ローマでは、キケロやその他に用例がある。そして「ソノ」*hottus*は、後に、類をもって集まったもの、にも用いられるようになる。

フランス語でも、「ソノ」が、事物の集まるどころ、類をもって集まったもの、の意味になる例があり、辞典の名にも用いられている。なお、アナトール・フランスの随想集『エピクロスの園』（一八九四年）は、邦訳が、一九一九年（和氣律次郎）、一九二三年（鈴木信太郎）、一九一九年（草野貞之）に出ているという。

もう一つ付け加えさせて頂きたい。「史苑の窓」は、藤木久志教授が立教大学史学会の会長の時に、始められたものである。第四九巻一号（一九八九年四月）の編集後記は、「窓」の開始を告げているが、どうして「窓」と名づけられたのかは、述べていない。私は、この欄の設置には、さすがと敬服して直ちに賛同したが、「ソノ」の「マド」という言い方は、率直にいうって、しっ

史苑（第五五巻二号）

くり来なかった。『岩波国語辞典』で「窓」を「外と内をつなぐもの」と説明していたのを見て、とりあえず納得したものである。最近、木津雅代『中国の庭園』（東京堂出版、一九九四年）を読んだ。序章に庭園の観賞方法が述べられている。庭園を訪れるときは、洞門をくぐり、くねくねと曲がりながら続く廊下を歩き、廊下の壁の「透かし窓」から風景を垣間見ることになる。この窓（窗）は、花窓あるいは漏窓とよばれ、そこを通して見る風景は限られるが、やがて広い所に出れば、大きな景色がたのしめる。こういう所を、歩いたり、立ち止まったりして、観賞するのが、一番の方法だという。これか、と思った。藤木さんは今年の研究休暇なので、まだ申し上げていない。（立教大学教授）